

# 京都市帝國大學經濟學會

# 經濟論叢

第 十 八 卷      第 四 號

大正十三年四月一日發行

故戸田海市博士肖像并に哀詞

## 論 叢

虞夏書に見<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>る政治經濟思想 . . . 法學博士 田島 錦治

階級の動學的考察 . . . 文學博士 高田 保馬

獨逸最近の社會學論 . . . 文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて . . . 法學博士 山本美越乃

## 時 論

不景氣と租稅 . . . 法學博士 神戸 正雄

## 說 苑

一子相續制度に就いて . . . 經濟學士 八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展 . . . 經濟學士 森 耕二郎

## 雜 錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西田幾太郎) ○戸田博士を憶ひ

て(福田徳三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上盛) ○戸田

博士と私(河田嗣郎) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪

市労働調査事業(關 二)

## 戸田先生を憶ふ

小島昌太郎

戸田先生が、鉛筆の細字で書かれたオクタヴ  
型のノートペーパー十一頁の手記が、今は先  
生の記念となつて私の書架にある。それは、私  
が留學するに當り或問題をもつて行つたのであ  
るが、向ふでそれに關する材料を手に入れるこ

とが出来ず、又その問題を取扱つた論著をも見出すことが出来なかつたので、先生への御見舞の手紙の中に一寸そのことを書いて置いたところ、それを讀まれた先生が私に大變同情して下さつて、あの大病の身をかまはず、病床に在つて氣分のない時々に、私の研究を指導する爲めに書き留めて置いて下さつたものである。

此の手記を昨冬歸朝後奥棟から貰つて、私は、先生が後進を思はるゝ情の厚いのに感泣するの外はなかつた。そして先生の病が一日も早く愈り、親しく之について尙詳しい指導を受け得る日の來らむことを祈つて居つたのに、その後つひにお目に懸る機會なくして、卒去せられたのは、洵に遺憾に耐えない。

先生が後進を指導せらるゝことの懇篤にして熱心であつたのには、凡そ先生の教授指導を受けたもの、皆感謝して措かざる所である。私は學生として教場で先生の講義を聞き、又卒業後常に研究上の指導を受けた。當時先生は椅子によらるゝことなく、大抵立つた儘、張りのある

一種の澄んだ聲で講義をせられ、筆記の一段落が終る毎に件の部分の説明をせられるのであるが、併しその説明は筆記の内容を反復せられるのではなくて、之に關係ある事柄や類似の問題を捉へ來つて、縦横に論じ、學生をして、筆記の表面に見はれた先生の議論には、更にその奥に深奥なる理論の潜めるものなることを覺らしめられた。之は後に何かの事柄について先生から話を聞いて居た際に私の理解した所であるが、先生の有つて居た際に私の一種の深奥な理論は、從來の哲學者などの論述より學ばれたものではなく、先生が直接に、又は新聞雜誌雜著等を通じて間接に、生きた社會を觀察し考覈して體得せられたもの、様である。實に先生は、先生の、又、社會の實相を擲んで居られた。であるから、その講義が深奥であつたと共に、その世間に發表せられた意見が、實際問題に處するに適切であつて、社會を裨益する所頗る多かつたのである。

先生の指導に實に懇篤なものであつた。何か

書いた物を差出したときには、必ずそののちこちに先生の意見を記した澤山の貼り紙をして返して下された。又單純な訪問の際でも、先生

自ら何かの問題を持ち出して、之を諄々として述べられるのであつた。私が大學卒業前後の數年、先生は、夏や冬を攝津の魚崎で暮らされたことがある。當時私も先生の家の近くに居つたので、殆ど毎日、舟を漕いで海へ出たり、又は海岸や、山手の散歩にお伴したのであつた。散歩のときなど、先生はステッキをくるく／＼車輪の様に廻轉さしながら、西洋の風俗習慣歴史を話されたり、又はその時々の特々の時事問題を解説論議せられた。私は、こう云ふ際に時事問題の考へ方などを自然に教へられた様に思ふ。

先生は花卉が大變好きであつた。その中でもダリヤを最も好まれて、その栽培も手に入つたものであつた。今は農學部の敷地に編入せられた元の住宅の廣い庭などは、晩春から晩秋にかけて、色とりどりの美しいダリヤが一面に咲き亂れて居つた。そう云ふ時候には先生の姿はよ

くダリヤの裡に見出されるのであつた。私なども度々その花を買つて歸つた。

住宅が移轉せらるゝことになり、須磨へ養生に行かれてからは、花卉を栽培せられる機會も少くなつたので、先生の樂みは、偉人の傳記や未開民族の風俗習慣などを記した書物を讀まるゝことゝなつた。それも大變好んで熱心に讀まれたので、大學所藏のこう云ふ方面の書物で未讀のものは殆どないだらうと云ふことである。

研究に、讀書に、指導に、さては花卉の栽培にまでも熱心であつた戸田先生はつひに逝かれた。ダリヤもそろ／＼芽を出す頃となつたのに花咲かばとて、今では靈前に供へるの外ないのは涙の種である。